活動報告4

Activity Reports

スコットランドに学ぶ灯台の保存・継承・活用
―「海と灯台学」の視点から―

一般社団法人日本海洋文化総合研究所（以下、海総研）は、2025年度の活動の一環として、「学のコミュニティの発展」を視野に、スコットランドで調査を行った。

スコットランドは、日本に近代灯台建設技術を伝え、「日本の灯台の父」と称される土木技術者リチャード・ヘンリー・ブラントンの出身地である。

今回の調査では、日本の灯台と深い関わりをもつこの地で、灯台がどのように守られ、どのような人々に支えられてきたのか、当時の人々の息遣いを知ることを大きな目的とした。

あわせて、灯台のマネジメントに携わる人々が、歴史、技術、文化をどのように受け継ぎ、どのような思いをもって活動しているのかを確かめることも、本調査の重要なねらいであった。

現地のコーディネートは、在エディンバラ日本国総領事館の阿部正隆領事に協力を得た。阿部氏は、日本とスコットランドの文化交流等に携わり、両地域の人々や組織をつなぐ役割を担っている。また、灯台への深い関心を持ち、『海と灯台学ジャーナル創刊準備号』にも論文を寄稿している。

阿部氏は、スコットランドの灯台関係者との信頼関係を基盤に、海総研と各訪問先との貴重なご縁をつないでくれた。調査期間中は各訪問先に同行し、対話と交流の橋渡し役も担ってくれた。

こうした阿部氏の尽力により、灯台に関わる多様な人々や関連施設、そして灯台の維持・運営を担う組織を訪問することができた。以下、各訪問先での見聞と対話をたどりながら、現地で得られた知見を報告する。

2025 年 9 月 3 日　1 日目
Northern Lighthouse Board
（北部灯台局）訪問

　スコットランド・エディンバラにある Northern Lighthouse Board（北部灯台局、以下 NLB）本部を訪問した。9 月 3 日は、イギリスにおける「マーチャント・ネイビー・デー（商船隊の日）」にあたり、この日は、建物に 3 種類の旗が掲げられていた。白地の旗のうち 1 つはイギリス国旗ユニオン・ジャックで、もう 1 つは NLB のコミッショナー旗である。さらに、赤地にユニオン・ジャックを配したレッド・エンサイン（商船旗）も掲げられていた。

　レッド・エンサインは、戦時・平時を問わず国家を支えてきた商船隊の船員たちの貢献をたたえるために掲揚されるものである。海上安全を担う NLB も、この日にあわせて敬意を表していた（写真 1）。

　エディンバラの 84 ジョージ・ストリートに建つこの建物は、1832 年から NLB の本部として用いられてきた。そのころ、灯台建設を実質的に担っていたのはスティーブンソン家の技師たちであった。スティーブンソン家は、150 年以上にわたり NLB の灯台建設を牽引してきた一族として知られており、この建物は、彼らにとって重要な拠点でもあった（写真 2、3）。

写真 1：3 つの旗が掲げられるのはこの日だけ

写真 2：Northern Lighthouse board本部（エディンバラの84ジョージ･ストリート）

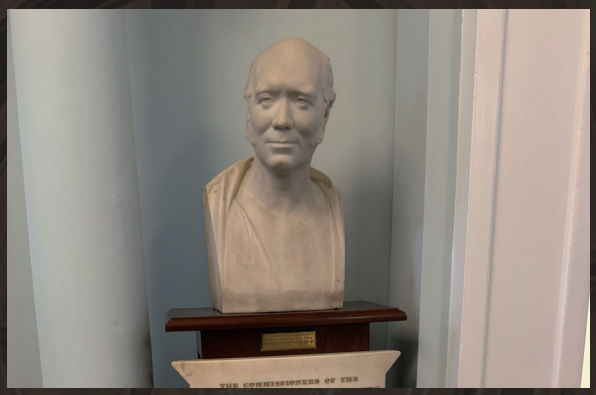


写真 3：建物のエントランスには、スティーブンソンの胸像が設置されていた。スティーブンソン家の技師たちが世界をリードした灯台技術の拠点の証である

　この本部で、NLB 最高経営責任者（CEO）のマイク・バロック（Mike Bullock）氏と意見交換を行った（写真 4）。マイク氏によれば、1786 年の NLB 創設当初、灯台の設置は、必ずしも地域社会に手放しで歓迎されたわけではなかった。古くから沿岸の住民にとって、浜辺に漂着する難破船の積荷は「神からの贈り物」と呼ばれ、厳しい暮らしを支える貴重な糧となっていた。灯台の光は航海の安全を守る一方で、こうした恩恵にあずかる機会を奪う存在でもあったからだ。

　こうした状況を受け、NLB では、スコットランド国王法務官（Law Agents of the Crown）や沿岸諸州のシェリフ（Sheriffs of coastal counties）をはじめ、法務・行政・商業の各界から公職者を委員（Commissioners）に据える体制を確立した。これにより、海難防止という公共の利益を追求するための、強固な組織基盤が構

写真 4：NLBのCEOマイク・バロック氏

写真 5：NLB が所有する航路標識業務専用船「PHAROS」にアン王女も乗船し、灯台を訪れている

築された。

NLB は創設以来、公的機関としての役割を担いながら、海上安全を支えてきた。その公的役割の重みは現在にも受け継がれており、プリンセス・ロイヤル殿下（アン王女）は、1993 年から NLB のパトロンを務めている（写真 5）。

現在、NLB は、スコットランドおよびマン島において 208 基の灯台を運用・維持管理している。業務は灯台の維持管理にとどまらず、海上の安全確保、環境対応、技術運用への協力など多岐にわたる。とりわけ近年は、気候変動への対応、持続可能性への取り組み、文化遺産の保存に力を注いでいる。

マイク氏は、「私たちが最も大切にしているのは、元従業員とともに伝統を守り続けていくことだ」と語った（写真 6）。NLB では、元従業員が集う催しを継続的に開催しているほか、元従業員から集めた「物語」を記録し、映像として残すオーラルヒストリーの取り組みも進めている。

こうした取り組みは、灯台の歴史的遺産を保護し、その価値を啓発することを目的として 2009 年に NLB の外郭慈善団体として設立された Northern Lighthouse Heritage Trust が行っている。教育や地域のプロジェクト等の支援のほか、コロナ禍には灯台博物館の給与補填も行った。1900 年に Flannan Isles（フラナン諸島）で起きた「灯台守失踪事件」を題材にした演劇のスポンサーを務めた例もある。

写真 6：マイク氏の執務室で意見交換を行った。左から海総研の池ノ上代表理事、阿部領事、マイク氏

写真７：NLBの理事会や外部機関との会議を開催する「ボードルーム」

写真９：地下にあるスティーブンソン・ルームへ

写真８：左から阿部領事、フィオナ・ホームズ氏、海総研の池ノ上代表理事、筆者

写真10：小さな灯台博物館のような展示の数々

写真11：NLBの歩みを記した年表

また、マイク氏からは、NLB がかつて運航していた船「Fingal」を「浮かぶホテル」として再生した事例が挙げられた。灯台にまつわる記憶や物語の保存にとどまらず、観光や地域振興へと接続されている点は、示唆に富むものであった。

続いて、NLB の広報担当であるフィオナ・ホームズ（Fiona Holmes）氏の案内により、館内ツアーを行われた。最初に案内されたのは、理事会や外部機関との会議に用いられる「ボードルーム」である。この部屋は、設立当初から重要な技術的判断や理事会の審議が行われてきた、NLB の意思決定を担ってきた空間である。室内には巨大なマホガニー製のテーブルが置かれ、かつてここで技師や理事たちが灯台建設の計画や図面を広げ、議論を重ねてきたことが彷彿とされた（写真 7、8）。

次に案内された「スティーブンソン・ルーム」は、ロバート・スティーブンソンに始まる灯台エンジニア一族の功績をたたえて名づけられた部屋である。室内には、真ちゅう製のレンズ、古い光学機器、航路標識ブイ、救命装備などが展示され、スティーブンソン家の肖像や言葉を紹介するパネルも並んでいた。小規模ながら、灯台技術の歴史を凝縮した展示空間となっており、過去の技術的遺産と現代の海上安全の実務とを結びつける、象徴的な場所であった（写真 9、10、11）。

これらの見聞を通じて、NLB が、灯台の維持管理にとどまらず、海上安全の実務と文化継承の役割を一体的に担っていることを、より具体的に理解することができた。日本における灯台の保存・活用を考えるうえでも、公的信頼、記憶の継承、地域との接続をあわせて捉える視点が重要であることが確認された。

また、NLB の活動の背景には、灯台に携わってきた人々への深い敬意があることがうかがえた。その根底には、人々の安全を守るという大きな使命があるのだと感じた。こうした使命感に裏打ちされた、資料や記録を将来へ継承しようとする真摯な取り組みは、極めて意義深いものであった。

写真 12：特別室にセッティングされていた史料の数々

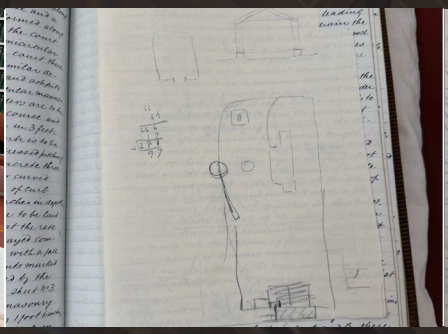


写真 13：日本の灯台について書かれたページにはさまっていたメモ

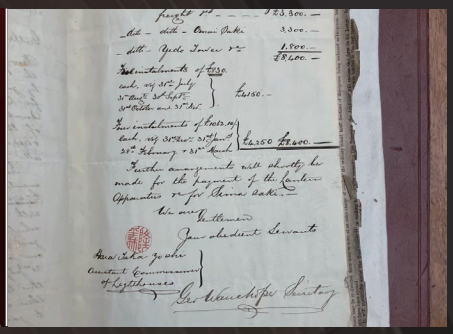
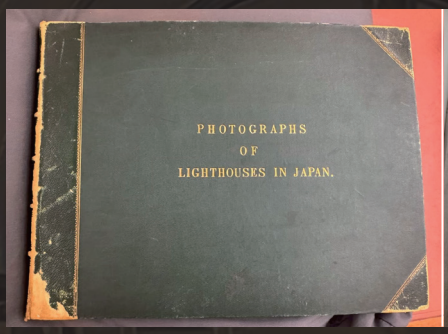


写真 14：スティーブンソン事務所のレター



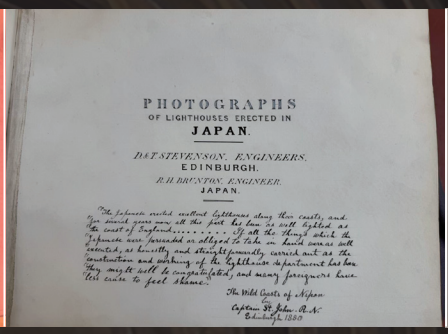


写真 15、16：スティーブンソンとブラントンによって建設された日本の灯台写真集

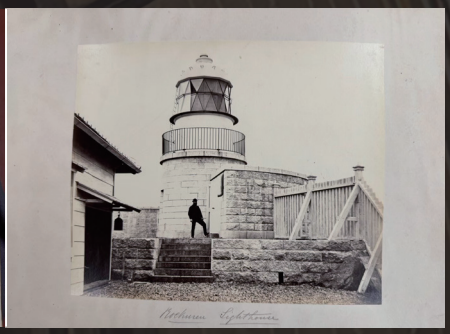


写真17：写真集の中の1枚。静岡県下田市にある神子元島灯台。ブラントンの設計。石造りとしては、当時の姿をそのままにしている、日本に現存する最古の灯台

2025 年 9 月 3 日
National Library of Scotland
（スコットランド国立図書館）訪問

エディンバラにあるスコットランド国立図書館を訪問した。出迎えてくれたのは、Head of Archives & Manuscript Collections のクリス・カッセルズ（Chris Cassells）氏 と、Curator、Archives & Manuscript Collections のアリソン・メトカーフ（Alison Metcalfe）氏である。案内された特別室には、すぐに閲覧できるよう、複数の史料が机上に用意されていた。そこに並んでいたのは、スティーブンソン事務所に宛てられた、日本の灯台に関する書簡や報告資料などである。いずれも、日本の近代灯台建設をめぐるやり取りを伝える貴重な一次資料であった。

これらの史料は、調査記録として撮影・保存した。日本の近代灯台建設がスコットランドの技術者たちと深く結びついていたことを、具体的にたどることができる重要な一次史料として、日本側の記録と対照・分析し、さらに検証を深めていくことの重要性を再確認した（写真 12 ～ 18）。

写真 18：左から 2 人目はクリス・カッセルズ氏、その右隣はアリソン・メトカーフ氏

2025 年 9 月 3 日
National Museum of Scotland
（スコットランド国立博物館）見学

エディンバラにある National Museum of Scotland（スコットランド国立博物館）を見学した。館内に入ってすぐのメインホール、「グランド・ギャラリー」に設置されている 19 世紀の灯台レンズが目を惹いた。

博物館では、スティーブンソン家の人々が約150年にわたり、スコットランド沿岸の灯台を設計・建設し、その技術と発想を世界へ広げていった歴史を伝えていた。

灯台建設は、単なる構造物の建設ではなく、危険な海岸で失われかねなかった多くの命と貨物を守るための技術的実践でもあったことが、展示から明確に読み取れた。こうした技術史を視覚的に伝える展示手法は、灯台の価値を一般社会へ開くうえで有効であり、日本にもすでに灯台資料館などを通じた展示の実践があるなかで、その意義をあらためて考えさせるものであった。

2025年9月4日　2日目
The Museum of Scottish Lighthouses
（スコットランド灯台博物館）訪問

The Museum of Scottish Lighthouses（以下、スコットランド灯台博物館）を訪問し、館長のリンダ・マクギガン（Lynda McGuigan）氏、コレクションズ・マネージャーのマイケル・ストラカン（Michael Strachan）氏、リテールマネージャーのマイケル・クルックシャンク（Michael Cruickshank）氏と意見交換を行った。

当博物館は、アバディーンシャー北東部の漁港フレイザーバラに位置し、灯台・城・博物館が一体となった、きわめてユニークな文化遺産複合施設である。

マイケル・ストラカン氏に、フレネルレンズの収蔵で、世界最大規模を誇る館内の展示を案内していただいた（写真22～26）。

館内には、スティーブンソン家をはじめ、技術者たちの歩みと技術革新の蓄積が、レンズや機器、図面、模型などの展示を通じて立体的に示されていた。

同時に、灯台守をはじめとする灯台関係者が、過酷な自然条件のもとで灯台を守り続けてきた営みも丁寧に伝えていた。

なかでも、ベルロック灯台にまつわる「Bell Rock Flags（ベル・ロック・フラッグス）」のストーリーは印象的であった。ベルロック灯台は陸地から約12マイル離れた岩礁上にある。教会へ礼拝に行くことができない灯台守のために、ロバート・スティーブンソンの娘、ジェーン・スティーブンソンが手づくりのフラッグ2枚のうち1枚を「信仰の対象」としてベルロック灯台に贈ったという話を、マイケル・ストラカン氏が解説してくれた。

ジェーンは、ベルロック灯台建設に関する父の著作の口述筆記を担うなど、灯台建設の記録にも深く関わっていたという。また、織物の技能に加え、優れたイラストレーターでもあり、作品の一部が兄弟たちの工学書に掲載されたという。

写真19：このフレネルレンズは,1985年に最後の灯台守が去り、灯台が自動化されるまで、インチキース灯台で使用されていた

写真20、21：灯台建設に関わる技術者たちが、スコットランドの景観を変えただけでなく、その技術と発想を世界中へ広めていったことを伝えていた

22 23 24
25 26

写真22～26：イギリス最大のレンズコレクションは圧巻。コレクションズ・マネージャーであり、著書をもつ歴史研究者でもあるマイケル・ストラカン氏が案内してくれた

この逸話は、スティーブンソン家の灯台と灯台に関わる人々への深い敬意の表れといえるかもしれない（写真 27、28）。

次に、マイケル・クルックシャンク氏の案内で、スコットランド灯台博物館の中心に位置する Kinnaird Head Castle（キンネアード・ヘッド城）を見学した。キンネアード・ヘッド城は 16 世紀に居城として築かれ、1787 年に NLB によってスコットランド本土初の灯台へと転用された。城郭の構造を残したまま灯台へ改修された点は、きわめて珍しい事例である。

現在、城内には灯台守の居室があり、20 世紀の生活用品や灯台業務に関する資料が当時のまま展示されている。来館者は、城から灯台へ、さらに博物館へと重ねられてきた用途の変化を、建物内部の構成を通して視覚的にたどることができる（写真 29、30）。

灯台守の居室のさらに上階へ進むと、Kinnaird Head Lighthouse（キンネアード・ヘッド灯台）を見学することができる。キンネアード・ヘッド灯台は、スコットランド本土初の灯台として 1787 年に点灯した。

その後、構造上の問題が生じはじめたため、ロバート・スティーブンソンが改修を手がけた。基

写真27、28：1820年に贈呈されたベルロックフラッグの写真（上）と現物（下）

写真29、30：かつて灯台守が住んでいた居室

写真 31：1991 年まで航路標識として使われていたキンネアード・ヘッド灯台

礎や外壁、さらに城の中心部を貫く螺旋階段を設計し、1824 年に改修工事を完成させた。

もとの城の構造を生かしながら、灯台としての機能が確立されたのである（写真 31、32）。

同博物館は、灯台の技術だけでなく、灯台を囲む人々の暮らしや物語が実感を伴って伝わってくる点が大きな魅力であり、国内外から多くの人が足を運んでいる。リンダ氏によれば、年間約 3 万

写真 32：マイケル・クルックシャンク氏（写真左）と灯台内部へ。世界最大級の「ハイパー・ラジアル・レンズ」が設置されている

写真33：左から3人目がリンダ・マクギガン館長

人の来館者が 50 カ国以上から訪れているという。

その背景には、灯台守の暮らしや技術的背景への理解を促すガイドツアーや体験プログラム、教育プログラムなど、多様な教育普及活動の存在がある。これらの活動は、来館者に灯台の価値を立体的に伝えるだけでなく、雇用機会の創出やボランティア活動の機会の提供にもつながっている。灯台を地域経済、雇用、教育、観光と結びつけて捉え直す実践からは、重要な示唆が得られた（写真 33）。

2025 年 9 月 4 日
リチャード・ヘンリー・ブラントン（Richard Henry Brunton）伝記の著者との意見交換

「日本の灯台の父」と称されるリチャード・ヘンリー・ブラントン（Richard Henry Brunton）の生涯を、国際的視野から再評価した伝記の著者、ジェフ・グールニック（Geoff Goolnik）氏と意見交換を行うため、ストーンヘイブンを訪れた。ジェフ氏は、はじめに、ブラントンが編纂した日

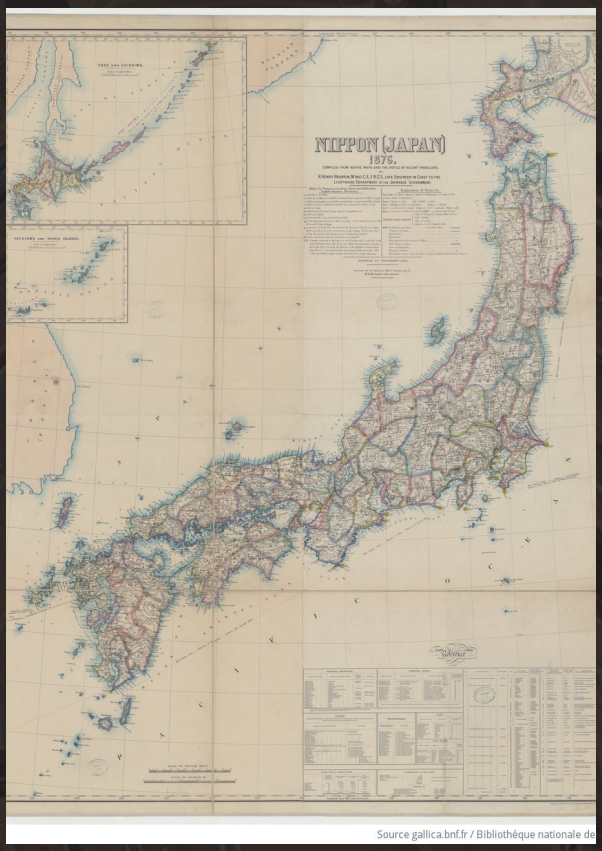


写真 34：リチャード・ヘンリー・ブラントンが編纂した日本地図。複製は現在も入手可能（出典 gallica.bnf.fr フランス国立図書館）

写真35：ジェフ・グールニック氏

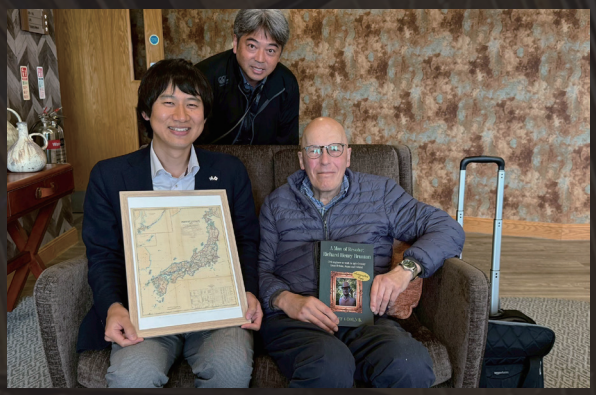


写真36：右がご自身の著書を手にしたジェフ氏

写真37：ストーンヘイブン近郊のマッコールズにあるブラントンの生家

本地図を見せてくれた。元となった地図はフランス国立図書館に所蔵されているそうだ。ジェフ氏は、「商業的には成功しなかったが、日本の自然や社会への関心を促す資料として重要な意味を持つ」と説明した。

さらに、ブラントンが日本に派遣され、灯台建設だけでなく都市計画にも関わっていたこと、日本の近代交通やインフラ構想全体に強い関心を寄せていたことにも触れた。そのうえで、ジェフ氏は、ブラントンの業績を単なる灯台技術者にとどめず、日本の近代化の初期を支えた総合的なインフラ設計者として捉え直すべきではないかとの見解を示した。

こうした視点を踏まえ、ブラントンが強い使命感と志をもって日本の近代化の現場に向き合った人物であることを、より立体的に捉えるため、その思想と行動の背景を今後さらに考察を深めていきたい（写真 34 ～ 37）。

2025 年 9 月 5 日　3 日目
Mull of Galloway Lighthouse
（マル・オブ・ギャロウェイ灯台）訪問

スコットランド最南端に位置する Mull of Galloway Lighthouse（マル・オブ・ギャロウェイ灯台）を訪問した。灯台を管理する NLB のバリー・ミラー（Barry Miller）氏と、来訪者案内や展示施設の運営を担うマル・オブ・ギャロウェイ・トラストのアレクサンダー・ピーブルス

写真 38：バリー・ミラー氏

写真 39：ダイアン・ジェイムス氏

写真 40：エンジンルームでの意見交換

写真41、42：イギリスの隠れた名所,マル･オブ･ギャロウェイ

（Alexander Peebles）氏、ダイアン・ジェイム（Dianne James）ス氏と意見交換を行った（写真 38 ～ 40）。

マル・オブ・ギャロウェイ灯台は、スコットランド最南端の人里離れた岬に位置し、景観の美しさで知られている。1830 年に初点灯した、ロバート・スティーブンソンの設計の灯台である。2024 年 11 月 21 日には、千葉県銚子市の犬吠埼灯台と世界初の「姉妹灯台」となった（写真 41 ～ 44）。

灯台敷地には、かつて灯台守の宿舎として使われていた 3 棟の宿泊施設がある。灯台施設が宿泊機能を伴うかたちで再生されている点は興味深く、内部の見学も楽しみにしていた。しかし当日は満室のため入室は叶わなかった（写真 45、46）。

マル・オブ・ギャロウェイ灯台の大きな特徴の一つは、ディーゼルエンジンによる霧笛の動態展示である。霧笛は 1987 年にその役目を終えたが、2018 年に復活し、現在ではスコットランド本土で唯一稼働する霧笛として、デモンストレーションと体験提供が行われている。

実際に、霧笛のデモンストレーションに参加し、エンジンの初期点火からスターターモーターの作動、エンジン回転に至るまでの工程を体験した。

写真43、44：ロバート･スティーブンソン設計のマル･オブ･ギャロウェイ灯台

写真45、46：３棟ある宿泊施設

エンジンルームの外で待つこと数分、霧笛の爆音が海へ向かって響き渡った。間近で聞く霧笛の音は圧倒的な迫力があり、その場にいた人々から歓声が上がった（写真 47 ～ 52）。

こうした体験型の公開は、当時の技術と工夫を来訪者に身体感覚を伴って伝えるものであり、文化継承の手法として有効であると感じた。かつて海霧のなかでこの音を頼りに航行した人々、そして灯台に携わった人々の時間に触れたようで、大変意義深いものであった。また、霧笛を単なる装置としてではなく、海の安全を支えてきた人々の記憶を宿す存在として捉え直す契機ともなった。

さらに、宿泊施設への転用と動態展示をあわせて提供する取り組みは、灯台を「見る対象」から「体験し、記憶する対象」へと広げる実践であり、日本における灯台の保存・活用を考えるうえでも、多くの示唆を与えるものであった。

スコットランドでの調査を終えて

今回のスコットランドの訪問において、灯台は単なる航路標識ではなく、海難の歴史を背景に、人命を守るために培われてきた技術や制度、そして地域の営みの積み重ねの上に成り立ってきた存在であることを深く認識した。

また、灯台に関わる人々の営みには、思いやりや助け合いの精神が息づいていることが見て取れた。

現地で出会った関係者の語りからは、施設の維持管理にとどまらず、そこで働いた人々の記憶も含めて灯台を受け継いでいこうとする一貫した姿

写真47～52：アレクサンダー氏のもと、エンジンのデモンストレーションと霧笛の体験の様子。爆音に歓声があがった

勢が、各地に共通してみられた。

しかしながら、その歴史的背景を探ると、灯台の設置は必ずしも地域社会に一様に受け入れられたわけではなく、事例によっては地域の生業や慣行との間に利害や葛藤を生んだ側面もあった。加えて、19 世紀以降の産業化に伴う海上輸送と交易の拡大が、灯台整備への社会的要請を強めたことも重要な背景である。こうした重層的な歴史の歩みを辿ることは、技術の発展のみならず、地域社会との葛藤や調整の過程に光を当てる重要性を教えてくれた。

こうした多角的な視点を持って改めて今回訪問した地を概観すると、灯台の保存・継承・活用は、実に多様な形で実践されていた。複合施設としての活用、宿泊施設への転用、地域観光との連携、動態展示など、多様な方法によって灯台は社会に開かれていた。また、その活用は地域の雇用や事業にも波及し、地域経済への循環を生み出す可能性を示していた。

灯台の歴史を物語として継承し、現代の利活用へ繋げる実践は、地域の持続可能な体制を築く鍵となる。日本の灯台の歴史にとって重要なこの地で、灯台のマネジメントに関わる人々の思いに直接触れることができたことは、本調査の大きな収穫であった。今回得られた知見を、日本における今後の灯台のあり方を考えるための手がかりとしたい。

謝辞

本調査の実施にあたり、阿部正隆氏（在エディンバラ日本国総領事館領事）から多大な協力を賜った。阿部氏は、全行程にわたり尽力いただき、現地関係者との橋渡しにもご協力いただいた。そのお力添えにより、「海と灯台学」の調査研究における重要な足がかりを得ることができた。ここに記して心より感謝を申し上げる。

あわせて、訪問先の各機関の関係者の皆様ならびに現地において案内および聞き取りにご協力いただいた皆様に、厚く御礼を申し上げる。

一般社団法人日本海洋文化総合研究所
チーフフェロー
大内さおり